

Title	「人はばけもの」 : 「西鶴諸国はなし」の発想
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49997">https://hdl.handle.net/11094/49997</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「人はばけもの」——『西鶴諸国はなし』の発想

飯倉洋一

『西鶴諸国はなし』（貞享二年刊）は三五話からなる短編説話集である。五巻五冊、各巻に七話ずつ配され、その全ての話に挿絵がある。さまざまな咄・奇談から成る「雑話物」として扱われ、典拠が明らかにされているものが多い。これまでの論は、大雑把を承知で言えば、西鶴が典拠をどう変奏しているかを分析することで西鶴の創作方法を考えようとするものが主流であった。一方で、『西鶴諸国はなし』がいかに生成したかを問い、仮説を提起した論文もある。岸得蔵『西鶴諸国はなし』考―その出生をたずねて―（『国語国文』一九七、十一月号のち『仮名草子と西鶴』成文堂 一九七）所収・宗政五十緒『西鶴諸国はなし』の成立（『西鶴論叢』中央公論社 一九七）・江本裕『西鶴諸国はなし―説話的発想につい

て―』（『近世文藝』第八号、一九三）らがそうである。小論は、これらの驥尾に附して、『西鶴諸国はなし』の発想の一面を論じるべく、「序文」をあらためて読み直してみたいと思う。ただし、「序文」に『諸国はなし』の発想や方法が原理的に示されているとは考えていない。三五話が同一の主題や方法で貫かれているというには、あまりにも多様だといわざるを得ないからである。

この「序文」には署名がない。水谷不倒がかつてみたという署名本は現在確認されない。無署名本が流通の形態として一般的であった可能性が高く、そうであれば署名がないことの意味を一応考えてしかるべきであろう。しかもこの「序文」は、この作品（テキスト）の本としての成立事情につい

て何も述べていない。「序文」としては特異であり、むしろこの「序文」を、『徒然草』序段のように、『西鶴諸国はなし』という短編集の最初のはなしと考えた方がいいのではないだろうか。まず本文を便宜的に五つに分けて掲げる。

① 世間の広き事、国くを見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。

② 熊野の奥には湯の中にひれふる魚有。筑前の国にはひとつをさし荷ひの大蕪有。豊後の大竹は手桶となり、わかさの国に式百余歳のしろびくにのすめり。近江の国堅田に七尺五寸の大女房もあり。丹波に一丈式尺のから鮭の宮あり。松前に百間つゞきの若和布有。

③ 阿波の鳴戸に童女のかけ硯あり。加賀のしら山にゑんまわうの巾着もあり。信濃の寢覚の床に浦嶋が火うち筥あり。かまくらに頼朝のこづかひ帳有。

④ 都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり。

⑤ これをおもふに人はばけもの、世にない物はなし。

①で序の書き手は、諸国を回って「はなしの種」を「もつめ」たという。広い「世間」をめぐれば、自分の知らない、

驚くような「はなしの種」があるに違いないと、それを求めたのである。この言い方がすでに特異である。先行説話集である『撰集抄』や『一休諸国物語』は、西行や一休の旅の先々での見聞を編集したという形をとっているものの、逸話を収集するために語り手が旅に出かけたわけではない。同時代の諸国奇談集の序文を見ても、「唯旅途の辛気はらし、休奇の雑談に聞事見る事を歌となく詞となく懐筆に書集て一束にみつ」（貞享二年刊『宗祇諸国物語』）、「八十計の翁の我にひとしき旅人おほく国をめぐりしとみえて、あるじの翁にむかひ、宮古より初て諸国にありこしことを物語るに旅のうさを忘れて」（貞享三年刊『浅草拾遺物語』）、「この尼諸国にて見聞しける事、すせうより始めて哀なる事おかしき事、あるはえんなるしな、または怪く妙なるなど、ひとつくより物がたりけるを」（貞享四年刊『御伽比丘尼』）等等、奇談収集の目的で、旅をするということ述べたものは見当たらない。西鶴作品の中においてさえ特異である。

『西鶴諸国はなし』はこれらの廻国譚や諸国説話収集姿勢を転倒した発想で、「はなしの種」を求めるために旅をしたというのである。そこが俳諧的であるといえよう。しかも求めたのは「はなし」そのものではなく「はなしの種」であ

る。「人のこころを種としてよろづのことはとな」(古今和歌集)序 って歌が生成するように、「はなしの種」をあつめて、「はなし」という花を咲かせるのだととれる(象徴的なのは、最終話巻五の七「銀が落としてある」である。財産を築くのお金を拾うのがよいと吹き込まれた男が、江戸に下つて本気でそれを実行しているのを知つて、「人宿」の亭主が「はる／＼正直にくだる心ざし」に感心して「咄の種に」近所の衆と「小判五両出し合」つて拾わせたというのである。「咄の種」を撒いてはなしに成長させようという咄創作の姿勢がうかがわれるではないか。『本朝二十不孝』巻一の四「慰み改て咄の点取」が兼題の咄の勝負に血眼になる男の話だったが、これにうかがえるように、「はなし」は工夫して作られるものでもあつたからである。このように「はなし」ではなく「はなしの種」を集めるという点も、他の諸国奇談集の序文と一線を画するところである。

旅は全国各地に及び、②③で列挙していくようなモノ(つまりこれが咄の種である)が実際に有つたというのである。「もとめ」た結果「有」つたのであり、これらは偶然見つけたものではない。諸国をめぐつて、人々に尋ね、探し求めた結果である。②③で列挙したモノについては、前掲岸得藏

『西鶴諸国はなし』考—その出生をたずねて—をはじめとして考証が進み、これらのモノが文献的に確認されること——つまりは、西鶴の創作ではなく実際にありうるものであること——が判明している。

②は常識では存在しない尺度のモノが実在したということ(この中には「式百余歳のしろびくに」「七尺五寸の大女房」というへんも存在するが、④の「大振袖の女」と同類ではなく、大燕や大竹に類する存在である)。③は伝承されてはいても存在の信じがたいものが実在したということである。②や③において書き手は、世間は広く、そこにはどんなものでもあるのだということを言っている。

しかし半面で書き手は、北は松前から南は筑前まで、途方もない長い旅をし、探し求めなければ、これらのモノの実在は確認されなかつたとも言っているのである。「国／＼をめぐりて」の語は書き手の矜持にとつて重いことばである。世の中にはとんでもないものが実在する、だがそれを確かめるには並々ならぬ覚悟と行動力が必要なのだということである。むろんそれは言葉の綾で、実際は必要にせまられて全国行脚をした結果「はなしの種」が集まったことを書いていると解すべきかもしれない。そうだとすてもあえてそういう書

き方を選んでいることを問題にしているのである。

ところが、こともあろうに「都の嵯峨に」「四十一迄大振袖の女」がいた。従来から言われているように、この最後の事例だけが、他と並列的ではない。ここに「序文」の屈曲点がある。もしこれがなければ、つまり③に続いて、「これをおもふに世間は広し、世にない物はなし」とすれば、この「序文」は屈折のないわかりやすいものになったはずである。なぜこのような異質なものがここで登場したのか。有働裕は「嵯峨の「四十一迄大振袖の女」に至っては、もはや不可思議な伝承さえも伴っていない。どこにでも有りがちな現実の「様相」とまで断定しては言い過ぎだろうか」と言い、これを「はなしの種」として打ち出す。「はなし手自身が提示されている」という〔西鶴 はなしの想像力〕（翰林書房 一九六〇）。しかし、一方で「再読してぞつとするのは『四十一迄大振袖の女』のイメージである」（『対訳西鶴全集五』解説 二六三、新版）と、この事例のインパクトの強さを述べるものもあり、これを承けて森田雅也は「この「嵯峨」の「女」の逸脱した若作りぶりは、非常識の域をはるかにこえ、日常にある怪奇ですらあったといえる」という（『西鶴諸国はなし』の余白<sup>マルゴ</sup>——その序文からの読みをめぐる——」（『日本文芸研究』50巻

4号 一九七〇。

この部分をどう読むかは、「序文」全体の中で考えていくべきだろう。肝要なことは、書き手が旅することと求めた「はなしの種」の数々の最後におかれたこの事例のみは、探し求めた結果見つかったものではなく、偶然に書き手の前に立ち現れたものだったということである。そう考える理由は、⑤の「これをおもふに人はばけもの、世にない物はなし」にある。大振袖の女がなぜ「人はばけもの」という認識を引き出すのか。それを「はなし手」がそう思っているからだと考えてもいいし、十分奇怪な事例だと考えてもかまわない。ただ、諸国を回らなくても、畿内である都の嵯峨のように足る事例があつたことに書き手が衝撃を受け、「世にない物はなし」という認識に結び付けられたということがこの際重要なのである。それまでにあげられた事例はすべて畿外である。「序文」がはじめから列挙してきた数々の諸国のモノの珍しさは、ここで一気に色あせて、「はなしの種」にはならなくなってしまうのである。「人はばけもの」であり、そこにこそ「はなしの種」があつたということ。それも求めずして存在したゆえに衝撃が大きかった。書き手はそれに最後

に気づいたというのである。

ここには、書き手がたどりついたはなしの認識、「はなしの種」の探索の物語が書かれているのであって、これ自体をひとつのはなしとしてとらえることができると言ったのも、積み重ねてきた「はなしの種」の探索の果てに、最もはなしとしてふさわしいのは、「人」の持つ「ばけもの」性が発現する話だったというオチになっているからである。まことに新しい諸国奇談の書にふさわしい巻頭話であるといえるだろう。

かねて言われているように、「序文」が、巻三の六「八畳敷の蓮の葉」の読みとかかわることはいうまでもない。本話は三つに分けられる。①吉野山に庵を結ぶ和尚のもとで人々が煎茶に日を暮らしていると、茶臼の心木の穴から細い蛇が出て袖子の木に登り雲に消える。里の人々が駆けつけて「竜が昇天した」と騒ぎになる。②その騒ぎを和尚が笑って「広い世界を知らないからだ」として、諸国の珍物を列挙する(この部分が「序文」と重なることが多い)。③むかし嵯峨の策彦和尚が入唐後に信長の前で、巨大な蓮の葉の話をする、信長が笑う。策彦は次の間で涙を流し、その理由を聞かれて「信長公天下を御しりあそばす程の御心入には、ちいさき事

の思はれ、泪を洒す」という。③は②の和尚の話の一部として捉えられてきたが、和尚の話は②でおわり、③は地の文と解する余地もある。和尚のいう「広き世界」の珍物の延長上に巨大な蓮の葉があるのに、その話が信長によつて笑われるという構図は、信長が「広き世界を見ぬ」矮小な人物として設定されていると考える以外には理解しにくい。しかし、そうすると、策彦は信長の心の小ささを嘆いて涙を流したという説に与することになるが、それでは「名僧」の話としてはあまり面白くないのである。巨大な蓮の葉は、②の珍物の流れにあり、諸国どころか海外まで実際に行つて初めて実見できるものである。ところが、その話を信長が笑い、策彦は涙を流す。前述のように信長の心の小ささを嘆いた涙なのか、あるいは信長の気宇壮大さに比べれば「八畳敷の蓮の葉」の話など小さいと気づいて感動した涙なのか、両説がある。信長はなぜ笑い、策彦はなぜ泣いたのか。この解釈において非常に興味深い説を宮澤照恵が提唱している。蓮の葉は太乙真人蓮葉図のパロディで、信長の笑いは釈迦の拈花を迦葉が一人理解して破顔微笑したことを踏まえたものであり、策彦の涙は、信長の気性から連想される後醍醐天皇を思い浮かべての「意志的な涙」であるというものである(『西鶴諸国はな

し」咄の創作―「八畳敷の蓮の葉」の構想と素材―「北星論集」第36号 一九二〇。信長の笑いと策彦の涙の關係が迂遠な感じは否めないが、このような解釈が出てくるのも、この場面が謎に満ちているからに他ならない。

①からの流れで考えてみよう。庵に集まり煎茶を楽しむ連中と吉野の法師、信長と策彦。ともに後者が前者に広い世界の話聞かせるのであるが、法師は笑い、策彦は泣く（信長が笑う）のである。法師と同様に、策彦は信長に未知の世界を教えようとしたのに、信長に笑われたことで、立場が逆転してしまうのである。この二つの話を並列的な咄とするのはやはり無理であろう（③を地の文と解したい所以である）これは、「序文」において珍しいモノの羅列が、都の大振袖の女によつて無化してしまう状況と似ている。策彦の話聞いて驚くのではなく笑う信長こそが、「ばけもの」に他ならない。まさに「天下を御しりあそばす程の」大きさに比べれば、「八畳」は小さいではないか。「天下を御しりあそばす」ことが「ばけもの」の所以である。「序文」のモチーフの再現、これが「八畳の蓮の葉」である。信長がなぜ笑ったかということ、あるいは西鶴が答えを用意しているにしろ、読者はとりあえず謎のまま残しておいてもよいのではないか。「ば

けもの」の不可解さを残すところにこそ意味があると思われるからだ。なお、③を地の文と解したとき、咄し手の存在がクローズアップされてくるだろう。類話の並列と見せかけた逆転で、「吉野の奥山にありし事」が相対化され、「名僧」のイメージが揺さぶられる。「序文」を補助線にして「八畳の蓮の葉」を読めば以上のごとくである。

「序文」に戻ろう。それにしても四十過ぎまで大振袖の女を化け物と見る発想はどこから来るものなのであろうか。散文の第一作『好色一代男』巻一の一「けした所が恋のはじまり」に、世の介の父夢介らがかぶき者として京の町を練り歩く場面で「化物が通るとはまことに是ぞかし」と語り手が言う。「或時は若衆出立、姿をかえて、墨染の長袖、又は、たて髪かつら」と、さまざまに扮装している姿を「化物」と称するのは、「大振袖」を着る四十すぎの女と通底する。西鶴が「人」を「ばけもの」と呼ぶとき、このようなケースが多い。『好色五人女』巻一の三「太鼓による獅子舞」では、花見に着飾つて出かける女達のことを「花は見ずに見られに行は今の世の人心なり。兎角女は化物姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし」といい、『好色一代女』巻六の一「暗女は屋の化物」は章題だが、「兎に白粉<sup>かほ</sup>盾<sup>はくふん</sup>の置墨<sup>たけな</sup>・尺長のひら

髻もとゆひを広畳に掛けて、梅花香の雫をふくませ、象牙のさし櫛かみ大おほきに万氣よろこをつけて拵へ、衣類とかしらは格別に違ひ、合点がてん頸くびのごとし。是いかなる女房やらんと子細を尋しに、いづれも世間をしのぶ暗物女といへり」と描写されるのも、同類である。これらは、化粧や扮装によつて別の人格に変身することを「人は化物」と称する例である。『好色盛衰記』巻一の三の冒頭「黒衣を着すれば出家、烏帽子しらはり着れば神主、長剣させば侍と成、世に人ほど化物はなし」の言葉が最も明快であろう。比喩的な言い方で、状況が人間を代えるという認識である。とりわけ「好色五人女」巻一の三の例は、人と化物の関係が逆転している可笑しさがある。本物の化物物が負けてしまうくらいに「ばけもの」性を人が持っているという文脈は、「序文」の論理そのものでもあるのだ。

奇談の集成を企てることを装う『西鶴諸国はなし』が、一貫して「人はばけもの」性を押し出しているというのは無理だろう。むしろ、一般的な奇談集の中に「人はばけもの」を織り込むことで、それを際立たせていると思われる。巻一の四「傘の御託宣」は神となつて娘をさしたせと託宣する傘（これは一種の化け物である）に、色後家が一夜奉仕するが、情けがなかつたとして傘を引き破るといふ、哄笑のうちに終

わる話であるが、「後家」という表徴をもつ人間の、度肝を抜くような行爲を描いて、「人はばけもの」の例話にふさわしい。巻二の六「男地蔵」は京都北野に隠棲する男が、娘を連れ去つては数日後に返すという不可解の行動をするが、目撃者は彼を「菅笠を着て、耳のながき女と、見るもあり。いや兒の黒き、目のひとつあるものと、とりどりに姿を見替ぬ」と、まさに先の「人はばけもの」のケースに適う描写がされる。このような「不思議の沙汰」に西鶴は解決を与えず読者に謎を残している。巻五の二「恋の出店」は、有能な商人の長兵衛のもとに、「素紙子ひとつに、深編笠着たる男」が、「少しの無心」をしに来る。すぐに承諾すると、浪人は娘の婿になつてくれと突然言い出す。娘は絶世の美女であり、持参金五百両を持つてくる。男は娘に「今日より世に、親ありとおもふなといふ声の下より、髪をき」つて行方知れずになる。男の出で立ち「人はばけもの」認識を想起させるが、これもまた謎を残している。西鶴が仮に答えを用意していたとしても、謎を謎として残したまま読むのが、「人はばけもの」を味わう読み方ではないか。

では西鶴はなぜ「人はばけもの」という認識を獲得しえたのか。ひとつの想像を記してこの稿を閉じたい。西鶴は他の



作品がそうであったように、俳諧的な発想契機でこれを獲得したと捉えられないだろうか。「俗源氏」としての『好色一代男』、『二十四孝』の反転である『本朝二十不孝』のように、『諸国はなし』にも何らかの本説が想定されよう。既に指摘されているように『宇治拾遺物語』もそのひとつであろう。しかし「人はばけもの」という視点に注目したとき、筆者は、その候補としてたとえば『諸国百物語』（延宝五年、京菊屋七郎兵衛刊）を挙げてみたい。伝本の少ない『諸国百物語』を西鶴が意識していた可能性を云々することには異論もあろうが、『諸国』を謳っていること、そして「ばけ物」話を集めたものであることが注目される。実際『諸国百物語』には「ばけ物」という語が頻出する。巻一の二十話をとってみれば、「ばけ物」八例、「へんげの物」二例、「亡霊」二例、天狗、きつね、亡魂、幽霊などが各一例で、圧倒的に「ばけ物」ということが多い。『武道伝来記』巻五の四で、「化物の出る百物語とやら」と言われるように、百物語といえはばけ物という連想はごく普通であった。

諸国にわたる化物咄の集成という先例があった。諸国奇談集を企画した西鶴は、定番的諸国化物咄である『諸国百物語』を俳諧化する発想で本作を構想したのではないか。俳諧

化とは化け物を怖がっている人間が実はもつとも恐ろしい化物だという逆転の発想である。怪談のひとつの流れは化物の存在を否定する弁惑物を生む（貞享三年刊『古今百物語評判』など）が、読物としては「不思議」をなくす方向になつてしまふ。西鶴は世の介の父のような「ばけ物」（『好色一代男』巻一の二）を奇談集に交え、それを種としては、なしを作ったのではなかっただろうか。

（いいくら・よういち 大阪大学教授）